

- (“Starting from Paumanok,” 4)、また「アメリカは過去を拒まない」とも言う。 *Collected: Leaves of Grass*, p. 709.
- 15 Trilling, p. 19.
  - 16 *Collected: Leaves of Grass*, p. 571.
  - 17 *Collected: Leaves of Grass*, pp. 564-66.
  - 18 R.W.B. Lewis, *The American Adam* (Princeton, New Jersey: Princeton Univ. Press, 1955), p. 5. Ralph Waldo Emerson, *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson* (1903-4: rpt. Boston: Houghton, Mifflin, 1979), I, 114. 吉崎邦子『ホイットマン—時代と共に生きる』(東京: 開文社出版、1992)、p. 132. p. 153. WhitmanとEmersonの関係については、吉崎、pp. 76-79.
  - 19 『アメリカ文学思潮史』、福田陸太郎編 (東京: 中教出版、1975)、p. 104. F.O. Matthiessen はアメリカ文学史中、19世紀半ばから南北戦争前の時期をアメリカン・ルネサンスと考えているようだ。 *American Renaissance* (London: Oxford Univ. Press, 1941), p. xi.
  - 20 *Collected: Leaves of Grass*, p. 710. 新しいアメリカ人の特性を最も体現する “Song of Myself” の「ぼく」については、吉崎、pp. 136-143.
  - 21 佐伯彰一『日本人の自伝』(東京: 講談社学術文庫、1991)、p. 79.
  - 22 Leslie A. Fiedler は、*Leaves of Grass* は Whitman の「中年のヒーローとしての芸術家の神秘化された肖像で、奇妙な自伝的叙事詩」であると言う。 Edwin Haviland Miller, *Walt Whitman's "Song of Myself"* (Iowa City: Univ. of Press, 1989), p. xvii.
  - 23 Gay Wilson Allen, *The New Walt Whitman Handbook* (New York: New York Univ. Press, 1975), p. 77.
  - 24 Richard Chase, *Walt Whitman Reconsidered* (New York: William Sloane Associates, 1955), pp. 76-77.
  - 25 *Collected: Leaves of Grass*, pp. 573-74.
  - 26 *Collected: Leaves of Grass*, p. 563.

Whitman 個人を超え、アメリカ人をも超えて、それらをすべて包含する自由と平等の国、アメリカ全体の個性を自己主張している、いわば「アメリカの自伝」と言えるのではないだろうか。

#### 注

- 1 この論文では純アメリカ文学が開花したアメリカン・ルネサンスの時期に合わせ、Whitmanの1850年代の*Leaves of Grass*、つまり最もアメリカのヴィジョンが高らかに歌われた初版と第2版を主として取り上げる。“Starting from Paumanok”の出版年は1860年であるが、内容的には1850年代の思想であり、事実彼が書き始めたのは*Leaves of Grass*初版(1855)後から1856年頃と考えられるので問題はなかろう。
- 2 以下、Lejeuneの自伝の定義については、中川久定『自伝の文学』(東京:岩波新書、1979)、pp.10-19. Philippe Lejeune, *Le Pacte autobiographique* (Paris, Seuil, 1975).
- 3 フランス語の“autobiographie”とは「出来事や事件を描きだすよりも、むしろその出来事や事件のなかで生きていた自分、主体として行動した自分そのものを書くような種類のメモワール」である(*Grand Dictionnaire universel du XIX siècle*, 1866)。中川、pp. 6-7.
- 4 Lionel Trilling, *Sincerity and Authenticity* (Cambridge, Massachusetts: Harvard Univ. Press, 1972), pp. 19-20, pp. 23-25.
- 5 中川、p. 174.
- 6 *Franklin*, ed. J. A. Leo Lemay (New York: The Library of America, 1987), p. 1307.
- 7 中川、p. 95.
- 8 中川、p. 175.
- 9 *The Collected Writings of Walt Whitman: Leaves of Grass: Comprehensive Reader's Edition*, eds. Harold W. Blodgett and Sculley Bradley (New York: New York Univ. Press, 1965), p. 563.
- 10 *Collected: Leaves of Grass*, p. 563.
- 11 人がしばしば陥る懐疑の弊害について、Whitmanは懐疑的生き方をすれば、落胆し陰気で排除され、苦悩と懐疑と絶望と不信の海を行くことになるという(“Song of Myself,” 43)。
- 12 中川、p. 36.
- 13 *Collected: Leaves of Grass*, p. 709.
- 14 Whitmanは*Leaves of Grass*初版の序文で、合衆国の最大の代表者は民衆であると述べる。*Collected: Leaves of Grass*, p. 710. 彼は19世紀の合衆国と過去の国々の関係について、合衆国の名において古代を侮蔑することはないと言

カの個性を自ら体現し、新しいアメリカ人として語り手「ぼく」を誕生させた。彼は一個人としての Walt Whitman であると同時に、個人の枠を超えた新しいアメリカ人全体を代表し、さらに広大で多様性に富み自由な国土アメリカ全体にまで自我を拡大している。この拡大した自我のなかに合衆国とアメリカ人と19世紀が渾然一体を成して存在しているので、“Song of Myself”の「ぼく」は Whitman 自身の自我であり、19世紀のアメリカとアメリカ人の自我でもある。

評論家の佐伯彰一は「気負いと反発が自伝の動機である」と言う。<sup>21</sup> 生粋のアメリカ人のアイデンティティを確立したかった Whitman は、アメリカナイズーションを果たし得ていなかった文学や価値観に対して「反発」を持ち、また彼自身が時代をリードしようとする「気負い」を持った。彼は新しいアメリカ人について語りたいという自伝的衝動に突き動かされた詩人であると言える。

批判家は、Lejeune の言うジャンルとしての自伝という意味ではないが、なんとか *Leaves of Grass* を Whitman の自伝と呼ぼうと努力する。Leslie Fiedler は、*Leaves of Grass* が Whitman の「奇妙な自伝的叙事詩」であると言った。<sup>22</sup> Gay Wilson Allen は、“Song of Myself” は Whitman の「心理的自伝」として読めると言う。<sup>23</sup> Richard Chase は、Rousseau や Wordsworth の自伝に比べながら、“Song of Myself” に自伝を探す。<sup>24</sup> 批評家たちがこのように考えるのは次の Whitman の言葉があるからだろう。

“Leaves of Grass” indeed (I cannot too often reiterate) has mainly been the outcropping of my own emotional and other personal nature—an attempt, from first to last, to put a *Person*, a human being (myself, in the latter half of the Nineteenth Century, in America,) freely, fully and truly on record.<sup>25</sup>

すなわち、*Leaves of Grass* (1855、1856) は最初から最後まで19世紀後半のアメリカに生きた Whitman 自身のすべての「人格」や「人間」を自由に、完全に、真実あらわにした記録であり、「一人の人間」である作者のアイデンティティを語るものである。<sup>26</sup> しかしながら、*Leaves of Grass* は、Whitman の個人史を超えるスケールの大きい作品である。*Leaves of Grass* に表出される Whitman の自己と、新しいアメリカ人と、19世紀後半のアメリカは三位一体となっており、三者は不可分である。従って1850年代の *Leaves of Grass* は、

演から約18年後、アメリカン・ルネサンスが花咲く19世紀半ばに登場した Whitman は、この新しいアメリカ人であった。個人の内面に神性を認め、自己の拡充を歌う彼は、19世紀半ばのアメリカ人こそ土着の完璧なアメリカ人であるとする。これまでアメリカ文学が無視してきた大衆こそが「新しい人間」であり、最も合衆国を代表するアメリカの新しいヒーローである。<sup>20</sup>

One's-Self I sing, a simple separate person,  
Yet utter the word Democratic, the word En-Masse.  
.....  
Of Life immense in passion, pulse, and power,  
Cheerful, for freest action form'd under the laws divine,  
The Modern Man I sing. ("One's-Self I sing")

生粋の完璧なアメリカ人に対する Whitman の信頼は、“Starting from Paumanok” に高らかに歌われる。

Americanos! conquerors! marches humanitarian!  
Foremost! century marches! Libertad! masses!  
For you a programme of chants.  
("Starting from Paumanok," 3)

And I will report all heroism from an American point of view.  
("Starting from Paumanok," 6)

19世紀半ばのアメリカは、他に対して博愛的で、おごらない、自由な大衆を新大陸の覇者としてようやく手に入れたのである。19世紀半ばという時代が生んだ新しいアメリカ人は、理想的人間として Whitman の自我とだぶる。Whitman がすべての英雄的資質をこのアメリカ人の観点から報告しようとするのは、真のアメリカ人としての自信と自負が彼にあるからだ。「新しい人間」という概念を基軸に補完し合う Whitman の自我とアメリカン・ルネサンスという時代性は、密接にかかわっており両者は不可分である。

これまで述べてきたように、Whitman は詩集 *Leaves of Grass* で、彼の自我に合衆国と19世紀の両者を取り込み多角的に表現した。“Song of Myself” や “Starting from Paumanok” などは、Lejeune の定義する厳密な Whitman の自伝ではないが、自我のありようを表現したいという自伝的衝動により書かれた作品である。Whitman は19世紀という時代が渴望したアメリ

がらも、自身の個性を保つ姿に感動する。そして群衆、平等、多様性を特質とするアメリカは「君とわたしにほかならない」と、彼はアメリカとの一体感を口にする（“By Blue Ontario’s Shore,” 8, 17）。それは彼がアメリカに生を受けたアメリカの個人（native American individuality）だからである。<sup>16</sup> このように多くの場合、相互依存し、強化し合う彼の自我と合衆国の自我は、簡単には切り離して考えられない。従って短詩 “I Hear America Singing”（1860）の表題のように、自伝的衝動に駆られた Whitman の自我が表現の形をとる詩からは、しばしばアメリカの歌声が聞こえてくる。

最後に自我の表現という Whitman の自伝的衝動と19世紀という時代の関係について論じよう。“A Backward Glance O’er Travel’d Roads” で Whitman は、「人間性とアイデンティティが熟成した」19世紀、特に19世紀後半という時代がなければ、*Leaves of Grass* は現れず、形をとることも、完成することもなかつたろうと回想した。<sup>17</sup> しかし *Leaves of Grass* では19世紀という時代だけが単独で描かれることはない。その概念は、具体的に Whitman が生きるアメリカの同時代人である「現代人」（the Modern Man）の個性に集約されて描かれるので、「現代人」へ脱皮していったアメリカ人の進化の歴史を知る必要がある。

Whitman の *Leaves of Grass* が現れる19世紀半ばまでの、白人によるアメリカの短い歴史に3種類の間人が存在したと考えられる。1620年のメイフラワー号による最初の移民から1776年の独立時までのアメリカ大陸の支配者は、ヨーロッパ人またはヨーロッパ的な人間であった。第2の間人は独立以後19世紀前半までのアメリカ人である。彼らの脳裏にはいつも母国ヨーロッパの価値観、思想、文化、流行、文学の残像が規範としてこびりついており、彼らは完璧なアメリカ人になりきれないでいた。1820年代以降、アメリカのヴィジョンをかかげた国民のコンセンサスづくりが言われるようになり、当時の新聞や政治家はアメリカが祖国イギリスと決別し、独自の文化と歴史と気質を確立するよう主張していた。Emerson は1837年、“The American Scholar”と題した講演で、「我々はヨーロッパの洗練された詩神に余りにも長く耳を傾けすぎた」とアメリカ文学の独立を提唱した。新聞記者であり、Emerson の精神的弟子であった Whitman が、このようなアメリカの個性と独自性を求める時代の声と期待に敏感であったのは言うまでもない。<sup>18</sup>

第3の間人は、アメリカン・ルネサンスの時代に文学や思想の規範を個人の外側ではなく、自分自身の内側に発見したアメリカ人である。<sup>19</sup> Emerson の講

や王国より、自由と平等を掲げるアメリカ合衆国の方が、はるかに偉大であるという確信が彼にはある。Whitmanの自国へのこの絶対的な自信と信頼と誇りが、アメリカに生まれた彼の自我を強化し支える。合衆国が平凡な大衆を主役にした史上初の国であるからこそ、その平凡な大衆と彼はまったく新しい価値を獲得し非凡な存在として、“Song of Myself”、“Song of the Broad-Axe” (1856)、“A Song for Occupations” (1855)などにヒーローとして登場するのである。Whitmanが旧大陸と旧大陸人に一線を画しながら古代を侮蔑せず、また過去を排斥しないのも、自国アメリカに対する絶対の自信があるからだ。<sup>14</sup>

Lionel Trillingは社会の自我について、「社会とはたやすく本質として考えられる概念である。社会について言われる事柄は、社会がそれ自体の人生と法則を持つことを暗示している。個々の人間の集合体である社会は、それだけにとどまらず人間以外の何かである。社会が実は、人間ではないが、それ自身の人生を有するという考え方は、人に社会の人生を人間性と一致させたいという欲望を起こさせる」と述べるが、Whitmanもまさしく能力と個性と人格を合衆国に見だし、彼の人生に重ねあわせて合衆国の人生を描こうと自伝的衝動に駆られている。<sup>15</sup>特に“Song of Myself”、“Starting from Paumanok”や“By Blue Ontario’s Shore” (1856)では、随所で合衆国の自然、広大な国土、各州の個性、都会、民主主義、国民の多様な生活が繰り返し描かれると共に、その豊富な資源も強調される。

Interlink’d, food-yielding lands!  
Land of coal and iron! land of gold! land of cotton, sugar, rice!  
Land of wheat, beef, pork! land of wool and hemp! land of the  
apple and the grape!  
Land of the pastoral plains, the grass-fields of the world!  
land of those sweet-air’d interminable plateaus!  
Land of the herd, the garden, the healthy house of adobie!  
 (“Starting from Paumanok,” 14)

これは合衆国が食料、鉱物資源、人的資源、領土などを獲得するために、非道にも武力で他国を侵略する必要のない祝福された正義の国であることを示唆している。また「一度も支配を受けたことのない」合衆国は民主主義をその信条とし、Whitmanのアメリカに対する誇りと信頼と賛美は増大するばかりである (“By Blue Ontario’s Shore,” 1, 17)。Whitmanは、アメリカがアメリカ人のみならず「人類のために」共和国を建設し、外国の特質に好奇心を示しな

賛歌を前面に押し出したこの姿勢こそ、“A Backward Glance O’er Travel’d Roads”で記された彼の“Personality”の表出であり、“Song of Myself”全体の基調である。

### 3

Whitmanの詩集*Leaves of Grass* (1892)を読んだ後、読者の記憶に残ることばや概念のうち代表的なものは、魂、肉体、死、性、自己、アメリカ、平等、民主主義、大衆などであろう。このうち「魂」、「肉体」、「死」は古今東西の人間が意識し関心を持つ身近なものであり、「性」と「自己」は近代人が意識し、表現するようになった概念である。そして「アメリカ」、「平等」、「民主主義」、「大衆」という語は、主に新大陸に固有なものである。またWhitmanの「自己」は、後述のようにアメリカ人の「自己」と重複するから、*Leaves of Grass*で表出される「自己」は、アメリカの個性（属性）と言っても間違いではなからう。従って、*Leaves of Grass*の中に描かれる自己、平等、民主主義、大衆という概念は、すべてアメリカ合衆国という記号で解読できる。ここではWhitmanの自己を19世紀半ばの合衆国との関係で考察する。

第2節で述べたように、*Leaves of Grass*はWhitman自身の総体的人間性(Personality)と、彼の自我を土台から支える合衆国および19世紀を表現したいという強い自伝的衝動により書かれた「頑固な記録」であるが、彼はどのように彼の国と時代について自己主張しているだろうか。次の引用は*Leaves of Grass*初版の序文の一節である。

The Americans of all nations at any time upon the earth have probably the fullest poetical nature. The United States themselves are essentially the greatest poem. In the history of the earth hitherto the largest and most stirring appear tame and orderly to their ampler largeness and stir. . . . Here is not merely a nation but a teeming nation of nations.<sup>13</sup>

ここにはアメリカ人こそ地上最も詩心に富んだ国民であり、合衆国そのものが本質的に最大の詩であり、史上最大にして最も感動的な国であるというWhitmanの母国に対する熱烈な賛美がある。過去の強大で絶対主義的な帝国

And if each and all be aware I sit content.

One world is aware and by far the largest to me, and that is  
myself,  
And whether I come to my own to-day or in ten thousand or ten  
million years,  
I can cheerfully take it now, or with equal cheerfulness I can wait.  
("Song of Myself," 20)

Whitman が彼自身を「堅実で健全である」と確信を持って自己認識ができるのは、この引用に示されるように、彼の存在そのものを最も基本的な形で把握するからである。すなわち彼は自己認識の大前提にありのままに存在している自己を置き、その自己を肯定し、事実として受けとめ満足する。「現実」を受け入れた彼はあえてそれに疑問は抱かない ("Song of Myself," 23)。Whitman のように自己をあるがままの存在であると考えられない懐疑的人間は、自己を懐疑的また否定的に定義した結果、不安定な自己に存在のもろさを見出し自己不信に陥る。<sup>11</sup> Whitman の自己信頼は、自己に対する認識の基準があまりにも単純であるため揺らぐことはない。またすべてを包含する時間の一部として自己を実感するので、世間が彼をどう評価しようと彼には関係ない。彼の「私とは何か」という問いは自己懐疑から発したのではなく、また観念的解決を求めたものでもなく、存在する自己を認識するためのものである。以上見てきた Whitman の自我のありようは、"Song of Myself" に描かれたほんの一例である。

自己を「あるがままの存在」と根底で認識し、その自己の存在の確かさを信じるからこそ、Whitman は次のように言える。

I celebrate myself, and sing myself,  
And what I assume you shall assume,  
For every atom belonging to me as good belongs to you.  
("Song of Myself," 1)

Rousseau の「結局のところ自分こそが人間のうちで最善の者といつも信じてきたし、今も信じている」という言葉が、強烈な自己主張と自己信頼から発せられたように、上記引用の Whitman の自己賛美は自己信頼を礎石としている。<sup>12</sup> 彼の自己信頼は彼個人への信頼であると同時に、他者も彼と同様に自己信頼できることを示唆する。キリスト教の神ではなく自己に絶対信頼を置き人間



人としてのWhitmanの“Personality”であることに疑問の余地はなかろう。1881年から現在の題“Song of Myself”に改題されたのは、“Song of the Open Road”や“Song of the Broad-Axe”が「大道」や「まさかり」をたたえるように、彼の自我を主張し積極的に賛美するためである。

以下、自伝的衝動で書かれた“Song of Myself”に表現される彼の自己認識を見てみよう。Whitmanは自己とは何かと問う。

Who goes there? hankering, gross, mystical, nude;  
How is it I extract strength from the beef I eat?  
What is a man anyhow? what am I? what are you?

(“Song of Myself,” 20)

人はしばしば自己のアイデンティティを求めて「私とは何か」と問い、自己探究心を満足させようとする。上記引用の「人間とは、ぼくとは、あなたとは何か」という問いは、自己の存在を哲学的、論理的に追求し証明しようとしたものではない。すでに答えの少なくとも一部は、この問いを発する2行前に示されている。Whitmanは彼自身を「渴望し、野卑で、靈感に富んだ、裸の」存在だと認識している。さらに少し前の14節でWhitmanは、彼自身が「最も平凡で、安っぽく、手近で、気楽な」人間であると宣言しており、彼の自己探究は驚くほどあっさりと解決されている。そしてこの「素朴で独立した」平凡な彼の自我は、“One’s-Self I Sing” (1867)で示されるように、「大衆のなかに」見いだされ、情熱と活力にあふれ、快活で奔放に行動する「近代の人間」の自我でもある。「私とは何か」という問いに、このようにWhitmanは大衆の一人である平凡な存在の自己を強調した。近代人の自己は自分が他人とは異なる存在であると認識する過程で形成されたが、Whitmanはまさにヨーロッパ人と異なるアメリカ人の個性、すなわち大衆の平凡さを、後述のように、自己の本質として強調している。

Whitmanのそのような自己認識は、次に示すように堅固である。

I know I am solid and sound,  
To me the converging objects of the universe perpetually flow,  
All are written to me, and I must get what the writing means.

.....  
I exist as I am, that is enough,  
If no other in the world be aware I sit content,

んど無名であった彼は、回復すべき名誉も自分の人生を語ってきかせる息子もなかったが、初の詩集を自費で出版しようと、生命力と希望に溢れていた。その詩集 *Leaves of Grass* 初版の核をなす “Song of Myself” には、3人のような具体的で個人的な動機は述べられていない。しかし Whitman の自伝的衝動は、1888年に出版された詩と散文から成る *November Boughs* の序文 “A Backward Glance o'er Travel'd Roads” という回想録に明確に記されている。

. . . I found myself remaining possess'd, at the age of thirty-one to thirty-three, with a special desire and conviction. Or. . . a desire that had been flitting through my previous life. . . had steadily advanced to the front, defined itself, and finally dominated everything else. This was a feeling or ambition to articulate and faithfully express in literary or poetic form, and uncompromisingly, my own physical, emotional, moral, intellectual, and aesthetic Personality, in the midst of, and tallying, the momentous spirit and facts of its immediate days, and of current America—and to exploit that Personality, identified with place and date, in a far more candid and comprehensive sense than any hitherto poem or book.<sup>9</sup>

31歳から33歳の頃、Whitman は彼の中で他のすべてを支配するある文学的欲望にとらわれていた。それは彼自身の肉体的、感情的、道徳的、知的、美的人間性をはっきり口に出し、忠実に、妥協せず文学的または詩的形式で表現したいという感情あるいは野心のようなものであった。彼は時代のただ中でアメリカの重大な精神と事実を記録しようと考えていた。彼の思いは、場所と時代に一体化しうる彼の人間的個性を、従来の詩や書物がなしえたよりはるかに率直かつ包括的な意味で、開発したいというものであった。上記引用文は、Rousseau や Franklin や Stendhal にまさるとも劣らず、Whitman に強い自伝的衝動があったことを物語る。さらに続くパラグラフで Whitman は、*Leaves of Grass* は19世紀と合衆国という背景に生きる彼自身の「アイデンティティ」を忠実に表現した「頑固な記録」(self-will'd record) であると言う。<sup>10</sup>

*Leaves of Grass* の中核をしめる長詩につけられた題は、上記の彼の自伝的衝動を証明するものである。初版では12編の詩がすべて無題であったから仕方がないが、第2版以降は “Poem of Walt Whitman, an American” や “Walt Whitman” という題が約25年間続いており、この詩の主題がアメリカ

Whitmanの個としての自己が追求されている。ここではLejeuneの様式的定義では、自伝のジャンルからはみ出る“Song of Myself”と“Starting from Paumanok”を、近代的自己を表出しようとする自伝的衝動の観点から読んでみよう。まず人はなぜ自伝を書くか、Lejeuneの言う典型的な自伝を書いたRousseau、Franklin、Stendhalの動機とWhitmanの*Leaves of Grass* (1855) 創作の動機と意図を参考にしつつ、“Song of Myself”に現れるWhitmanの自伝的衝動を明らかにし彼の自己について考察する。

近代になって欧米ではRousseau、Franklin、Stendhalの自伝があいついで書かれた。最も代表的で最高の自伝とされる*Les Confessions* (『告白』)をJean Jacques Rousseau (1712-78)が書いた直接のきっかけは、Voltaire (1694-1778)に匿名のパンフレットで私生活を事実と反した形で非難されたことにある。Rousseauはあるがままの自分を世間に示すことで、傷つけられた名誉を回復する目的で『告白』の執筆にかかった。しかし52歳で『告白』を書き始めてから第2部の完成までに6年もかかっているから、上記の理由ばかりではあるまい。Rousseauには宮廷貴族を中心に多くの人たちに受け入れられていないという自覚と共に、自分は彼らとは違うという強い自己主張があり、彼は自己の内面を開示することでその自己主張をしたと言えよう。<sup>5</sup>

Rousseauと同時代人であるアメリカのBenjamin Franklin (1706-90)が、息子に宛てた*Autobiography*を書き始めたのは64歳で、その直接の動機はRousseauのとは異なる。彼は息子に祖先のことや、彼自身のことを書き残して語り伝えたいこと、また人生をもう一度生き直すことが不可能なので、代わりに自分の人生の回想をすると述べており、いわば穏健なバランス感覚に富んでいる。<sup>6</sup>

一方、Henri Stendhal (1783-1842)は、自伝を書く動機を1831年の自伝的断片で明快に述べる。これまで、Mozart、Rossini、Michelangelo、Leonardo da Vinciなどの偉大な人物の伝記を書いてきたが、資料収集や矛盾する証言を吟味する根気を失くしたので、彼がすべてを熟知している人物の伝記を書こうというものである。<sup>7</sup> 一年後、49歳の彼は未完の*Souvenirs d'Égotisme* (『エゴチスムの回想』)を書いた。「私はなに者なのか」を問うた*Vie de Henry Brulard* (『アンリ・ブリュラルの生涯』)を完成した時、彼は53歳であった。<sup>8</sup>

上記3人が名声、年齢、回想という点で共通するのに対し、Whitmanはこの3点で彼らと決定的に異なっていた。36歳になったばかりで文学的にはほと

以上、Whitman の二つの詩を Lejeune の自伝の 4 つの要件に照合し検討したが、“Song of Myself” は散文で書かれた物語という第 1 の要件と、回顧的展望という第 4 の要件を満たしていない。Lejeune の第 1 の要件に従えば、“Song of Myself” は形式的には自伝ではなく自伝詩と分類される。だが、自伝詩の代表とされる Wordsworth の *The Prelude* と違い、内容的に詩人の経験を基にした物語性、及び回顧的要素にやや欠け、厳密には自伝詩と呼ぶには難があるかもしれない。

“Song of Myself” に比べ、“Starting from Paumanok” の場合、Lejeune の自伝の定義に合致するところが少ないばかりか、致命的なのは自伝契約が成立していないので擬自伝詩とも呼べない。本論文の冒頭に “Song of Myself” や “Starting from Paumanok” には自伝的要素があると指摘したが、それは作中に作者 Whitman の実生活の経験と感情が一部分描かれているという意味にすぎず、Lejeune の自伝の定義に厳密に従えば、残念ながらいずれも Whitman の自伝詩とは言い難い。

## 2

ここで前述の “memoirs” と “autobiography” の概念の微妙な違いに再び注意を払う必要がある。当然 “memoirs” はある程度 “autobiography” の要素も含んでいるが、“memoirs” は「作者個人の歴史よりもむしろ同時代の出来事のほうに主眼が置かれている」のである。一方、“autobiography” は「出来事や事件のなかで生きていた自分」、つまり出来事のなかの主体的自己を意識した視点から書かれた個人の歴史である。<sup>3</sup> 16世紀後半から17世紀初めにかけてヨーロッパでは、人間の性質に変異がおこり、17世紀初頭のイギリスでは、近代的英国民気質の主な特徴を備えた新しいタイプの人格が形成されるようになった。Lionel Trilling は「人は歴史のある時点で個人になった」と言うが、18世紀後半からヨーロッパに自伝が登場してきた背景には、作家にその「個人」の自我を表したい自伝的衝動があったからだ。<sup>4</sup>

Whitman の “Song of Myself” は自伝のジャンルには分類されないが、だからといって Whitman に自伝的衝動がなかったということにはならない。彼に作中で個人としての自分について語りた衝動があったからこそ、彼の自意識や自我が強く表現されることになる。自伝的衝動という点から見れば、“Song of Myself” はむろんのこと、“Starting from Paumanok” も、

節、また25節に語り手の名前が“Walt Whitman”または“Walt”と明記され、作者と語り手の「ぼく」が「マンハッタン育ち」であるという点でも、同一人物であることが証明される。さらに Lejeune は、作者の状況に関連して自伝の基本的な特徴として、作品のなかに自伝契約が存在することを挙げる。つまり作者がここで自伝を書くということを、読者に対して表記して契約しておかねばならない。“Song of Myself”は、かつて *Leaves of Grass* 初版では無題、第2版(1856)では“Poem of Walt Whitman, an American”という表題に、第3版(1860年)以降1881年に現在の表題になるまで、“Walt Whitman”という題であった。“Song of Myself”のこれまでの表題の変遷を考慮すると、この作品は当然詩人自身についての歌と理解され、自伝契約の点では問題はない。“Starting from Paumanok”の場合は、原稿の段階で“Premonition”、第3版で“Proto-Leaf”と題され、現在の題になったのが1867年版からであるが、いずれにしても表題及び作品中で自伝契約は成立していない。従って第3の要件に適合するのは“Song of Myself”だけである。

Lejeune の第4の自伝の要件は語り手の位置である。作中の語り手と主要人物が同一人物である必要がある。“Song of Myself”と“Starting from Paumanok”の語り手「ぼく」が、主要人物であるのは疑いないことである。従って“Song of Myself”の場合、テキスト内部における作者・語り手・主要人物の3者は見事に一致するが、Lejeune の言う語り手の「物語の回顧的展望」という点では、“Song of Myself”の語り手はその任務を十分に遂行していない。語り手「ぼく」は“It is time to explain myself” (44) と言うが、その内容は後述のように、必ずしもこれまで生きてきた Whitman 自身の実生活を述べるものではない。“Starting from Paumanok”の語り手「ぼく」も、Whitman 自身の過去の個人的人生の回顧というよりは、拡大した時間と空間における自己の様子について語る。両詩とも語り手の語りはしばしば現在時制でなされ、次の例に見られるように、現在と未来の自己のありようと、アメリカの現実と未来を展望するものである。

On my way a moment I pause,  
Here for you! and here for America!  
Still the present I raise aloft, still the future of the States I  
harbinger glad and sublime,  
And for the past I pronounce what the air holds of the red  
aborigines. (“Starting from Paumanok,” 16)

this air,  
Born here of parents born here from parents the same, and  
their parents the same,  
I, now thirty-seven years old in perfect health begin,  
Hoping to cease not till death. (“Song of Myself,” 1)

上に引用した箇所は“Song of Myself”の最初の節で、現在の「ぼく」が37歳で完璧な健康状態にあり、野原をぶらつき夏草の穂先を眺めながら、彼自身の存在の由来を家系図的に述べたところである。Leaves of Grass 初版(1855)が出版された時、Whitmanは36歳になって間もないはずであるが、この年齢を除くとこれは、彼の生活と歴史のごく一部を簡潔に描いた箇所と言える。さらに次に引用する箇所も一生活者としての彼自身を描いた部分である。

Walt Whitman, a kosmos, of Manhattan the son,  
Turbulent, fleshy, sensual, eating, drinking and breeding,  
No sentimentalist, no stander above men and women or apart from  
them,  
No more modest than immodest. . . . (“Song of Myself,” 24)

I will go to the bank by the wood and become undisguised and  
naked,  
I am mad for it to be in contact with me. (“Song of Myself,” 2)

Splashing my bare feet in the edge of the summer ripples on  
Paumanok’s sands,  
. . . . .  
Observing shows, births, improvements, structures, arts,  
Listening to orators and oratresses in public halls. . . .  
 (“Starting from Paumanok,” 14)

野人の生命力を持つ彼が戸外に出て素肌に大気を感じ、故郷ポーマノクの海岸でさざ波とたわむれ、町に来る見世物を見たり、知人の子供や弟妹の誕生を見たり、都会の進歩や建築物や美術品を眺め、男女の演説を聞くという描写は、Whitman自身の生活の一側面だったに違いない。従って“Song of Myself”と“Starting from Paumanok”の主題は、断片的ではあるがWhitmanの生活を描いており、Lejeuneの第2の要件を一応満たしていると言えよう。

Lejeuneの自伝の第3の要件は、作者と作品の語り手「私」が同一人であることが証明されねばならない。“Song of Myself”の場合、上に引用した24

「自伝」とは自ら書いた自分の伝記であるが、日本語の「自伝」はしばしば“memoirs”と“autobiography”を厳密に区別せず使われることが多い。「回想録、自叙伝」と訳される前者は、*The Oxford English Dictionary* (1978)によれば、「ある人がその生涯に起こった事件や知人、または関係した取引や活動について記述したもの」で自伝的な記録である。一方、“autobiography”は「その人自身の歴史を書いたもの」である。“memoirs”が作者自身の外界、またはその環境に力点を置くのに対し、“autobiography”はむしろ内的成長過程を含む「その人自身の歴史」を強調するニュアンスを持つ。つまり“autobiography”は事件よりも本人の人間性、人間味、自我のあり方などにより注意を向けると言えよう。そして本論文で扱う「自伝」ということばは“autobiography”の方である。

それではかなり濃い伝記的要素を持つ Whitman の“Song of Myself”と“Starting from Paumanok”は、自伝として自伝文学のジャンルに位置づけられるか、自伝文学の理論的研究が進んでいるフランスの研究者の定義に基づいて検討してみよう。*Le Pacte autobiographique* (『自伝契約』)を書いた Philippe Lejeune の自伝の定義によれば、自伝として成立するには4つの要件がある。<sup>2</sup> 第1の要件は、言語の形態が物語の形式をとり散文で書かれていることである。“Song of Myself” (1855) も“Starting from Paumanok” (1860) も、他の Whitman の詩同様、伝統的な韻文ではなく自由な散文に極めて近い散文詩ではあるが、純粹な散文とは言えず第一歩からつまずいてしまう。また物語という点では、いずれの詩も厳密には Whitman 自身に起こった事柄や事件を基軸にした語りではない。

Lejeune は自伝の定義の第2の要件として、作品の主題が「一個人の生活、一人物の歴史」であることを挙げる。Whitman の長詩“Song of Myself”は、彼の生活と歴史をすべて順序よく年代順に記載しているとは言えない。次の引用に見られるように、しばしば Whitman の生活の断片が部分的に脈絡もなく記述される。

I loafe and invite my soul,  
I lean and loafe at my ease observing a spear of summer grass.

My tongue, every atom of my blood, form'd from this soil,

# Leaves of Grass — アメリカの自伝

吉 崎 邦 子

アメリカン・ルネサンスと呼ばれる時期に登場した詩人Walt Whitman (1819-1892) の詩集*Leaves of Grass* (1855) の多くの詩には、自伝的要素が見られる。*Leaves of Grass*の第3版 (1860) の自己内省的な詩や、僚友愛を歌う“Calamus”詩群、あるいは南北戦争中、病院の付き添い人として観察した戦場の情景を描いた“Drum-Taps”詩群(1865-6)、リンカーン大統領の死を悼んだエレジー“When Lilacs Last in the Dooryard Bloom'd” (1865) などの背景には、Whitmanの私生活の一部が書きこまれている。また*Leaves of Grass*初版の“Song of Myself”や、出版年は遅れるが内容的には“Song of Myself”に近い“Starting from Paumanok”にも自伝的要素が顕著である。とくに以前タイトルに詩人自身の名を冠した前者は、一人称の語り手の視点、詩人自身の体験や状況と部分的に一致する内容を持ち、この作品を自伝のジャンルに分類したくなる。

だが直ちに“Song of Myself”や“Starting from Paumanok”を自伝だと断定するには問題がある。<sup>1</sup> 本論文では(1)Whitmanの“Song of Myself”と“Starting from Paumanok”をPhilippe Lejeuneの自伝の定義で検討し、はたしてWhitmanの自伝と呼べるか考察する。(2)次にRousseau、Franklin、Stendhalが自伝を書いた動機に言及しながら、Whitmanが詩のなかでこだわる「自己」表現は広い意味の自伝的衝動であることを論じる。(3)最後に*Leaves of Grass* (1855、1856) は、Whitmanによるアメリカの自己主張であり、アメリカの自伝であることを19世紀半ばのアメリカン・ルネサンスというコンテクストのなかで論証する。